

J・A・ラーキン著

『砂糖と現代フィリピン社会
の起源』John A. Larkin, *Sugar and the Origins of Modern Philippine Society*. Berkeley: University of California Press, 1993, xvi+337pp.ながの よしこ
永野善子

はじめに

本書は、「パンパンガ人——フィリピンの一地方における植民地社会——」(*The Pampangans: Colonial Society in a Philippine Province* [Berkeley: University of California Press, 1972]) によって、1970年代のフィリピン地方史研究に先鞭をつけた、アメリカ人フィリピン史研究者ジョン・A・ラーキンによる2つめの著作である。ラーキンがフィリピンのルソン島パンパンガ州とネグロス島の砂糖生産地域比較史研究にも従事していることを評者が知ったのは、1974年頃、ある論文集に掲載された研究案内(注¹)を通じてのことであった。もっとも、本書でその成果が活用されている、ラーキンのネグロス島でのインタビュー調査の時期はそれより以前の1970年であるから、彼は第1作「パンパンガ人」の完成と相前後してすでに、パンパンガ州とネグロス島の比較地域史研究を開始していたことになる。かつて評者自身、アメリカ植民地期を中心とするフィリピン砂糖産業史の研究に没頭し(注²)、1970年代半ばから幾度にもわたって、著者と手紙のやりとりをした経験がある。それだけに、評者は本書の完成を心待ちにしていたひとりであり、本書が著者から送られてきた時には深い感慨を覚えたものである。

本書は、フィリピン、アメリカ両国の図書館・公文書館所蔵の史資料を渉猟した、著者の20年にわたる研究の成果である。著者のねらいは、19世紀後半

にフィリピンにおける2大砂糖生産地帯の地位を確立した、ルソン島パンパンガ州とネグロス島西ネグロス州における社会経済構造の歴史的变化を比較考察することによって、フィリピン社会の近代化過程の一般的特徴を描き出すことにある。輸出向け砂糖産業が発展する過程で、パンパンガ州と西ネグロス州では、砂糖キビ作地主や製糖業者から成る富裕なエリート層と小作農や農園労働者から成る貧困層の2つの階層に分化した社会構造が形成されていったが、それぞれの社会構造にはどのような特徴がみられたのか、さらに、両地方のエリート層がいかなるかたちで、フィリピン中央の政界・経済界へと影響を及ぼすにいたったのかを、本書は分析の対象としている。この意味で、本書は、2つの地域の地方史の単なる比較考察の範囲を超えて、それぞれの地域社会と全国レベルの政治経済構造との接合の様式をも浮き彫りにすることをめざしたものである。著者自身の表現によれば、本書はこうした手法に拠りながら、「経済危機、政治的事件、社会的階層分化に対するフィリピン人たちの多様な対応をよりよく理解するために、植民地主義、フロンティア、フィリピン革命、独立闘争、農業不安の諸問題に対する新しい洞察を加えることを試みた」(8ページ)のである。

I 構成と内容

本書を構成する337ページのうち、本文は1~247ページで、以下、付録等249~266ページ、注267~321ページ、索引323~337ページと続いている。注に配分された頁数の多さが示すように、著者は英文による既存の研究論文・研究書に加えて、スペイン語や英語によるさまざまな統計および一次資料、さらには数種類の全国新聞や現地語による地方新聞などを徹底的に渉猟している。さて本文は、第1章「序論」、第2章「いしずえ、1565~1835年」、第3章「フロンティア、1836~1920年」、第4章「砂糖キビ作地帯のこころ」、第5章「製糖工場、1920~34年」、第6章「割当制、1935~41年」および「エピローグ」から成る。以下、章別にその要点を紹介

しよう。

第1章「序論」では、著者による本書のねらい（前述）が示されたあと、現在のパンパンガ州と西ネグロス州（島の西部に位置し、砂糖キビ作地が集中する州。ネグロス島は行政区画上、19世紀末以来東西両州に区分されている）の地理的特徴が比較されている。

第2章「いしずえ、1565～1835年」は、フィリピンにおける砂糖生産の起源をたどりながら、本格的な輸出向け砂糖生産が開始される以前の、パンパンガ州とネグロス島西部の社会経済構造を比較したものである。著者によると、パンパンガ州では、18世紀後半以降、買戻し契約 (pacto de retrovendendo) によって土地を集積した華人系メスティーツが国内消費用に砂糖生産に従事し始めた。この頃から同州ではサマカン (samacan) と呼ばれる、刈分け小作制が広範にみられるようになり、地主制がしだいに成立していった。これに対し、ネグロス島西部の地域では、この間、沿岸部のごく一部の行政町を除くとほとんど未開拓のまま、植民地政庁によって放置されていた。

第3章「フロンティア、1836～1920年」では主に、小規模な製糖所でムスコバド糖が生産されていた19世紀後半から1910年代末までの時期を扱っている。はじめに、1830年代後半以降の本格的な砂糖輸出期を、輸出量・輸出先および価格の変化を中心にたどり、ついで、ネグロス島西部のフロンティア開発とアシエンダ (hacienda, 大土地所有制＝農園) の形成過程が追跡され、最後に、砂糖産業の発展にともなうパンパンガ州の刈分け小作制の展開が素描されている。

それによると、19世紀後半にネグロス島西部での砂糖生産が急速に発展するなかで、パナイ島などからの移民が土地の横領や囲い込みを行ない、一握りのアセンデーロ (hacendero, 地主＝農園経営者) による土地の集積が進んだ。著者が整理した古文書によれば、1896年にはわずか12家族がネグロス島の20行政町の砂糖キビ作地5万3000^{ヘクタール}余の3分の1の土地を所有していたという。この頃ネグロス島では、地主自身がアシエンダの経営に従事するより、むし

ろ幾人かの借地人 (arrendatario, acsa, agsador) に土地を貸与するか、差配人 (administrador) や管理人 (encargado) に経営を委託するようになった。借地人の場合、1人当りの経営面積は10^{ヘクタール}から数百^{ヘクタール}までさまざまであった。経営面積が小規模の場合、借地人はみずから耕作に従事したが、比較的規模の大きなアシエンダでは、ドゥマアン (duma'an) と呼ばれる居住労働者が雇用される場合が多かった。なお、著者は、サカダ (sacada) と呼ばれる出稼ぎ労働者が収穫期に雇用されるようになったのは、1870年代に入ってからのことだろうと推測している。

これに対し、19世紀後半以降の砂糖生産の増大は、パンパンガ社会にも大きな変化をもたらした。ネグロス島で地主層を形成したのが他島からの移民であったのに対して、パンパンガ州のそれは、多くの場合、18世紀後半以降の商業的農業の展開とともに同州で経済基盤を確立しつつあった、華人系メスティーツであった。かれらの多くはいくつもの町にわたって分散的に土地を所有した。砂糖キビ作地で地主が借地人 (inquilino, mamuisan) に経営を委託する場合、借地人の地主への地代支払いは、定額現金払いか、生産された砂糖の分与の方式をとった。地主が、カサマツ (casamac) と呼ばれる刈分け小作農と小作契約を結ぶ場合、地主が、蔗苗、製糖設備のほか、製糖所の労働力を提供するのに対して、小作農は農具、役畜をもち、農作業に従事した。他方、とくに収穫期には、小作農たちの間の相互扶助 (sugu) 制度によって人手が確保された。こうして砂糖が生産されると、生産物は、地主と小作農の間で折半された。なお、砂糖の取引は、華人商人がほぼ独占していた。

さて第4章からは、叙述スタイルが一変する。すなわち、第1～3章では、パンパンガ州とネグロス島を別々に扱いながら、2つの地域の特性を議論し、それらをフィリピン社会全体のなかに位置づけるという手法がとられているが、第4章以降では、個別のテーマがいくつか掲げられ、そのテーマごとにパンパンガ州とネグロス島の特徴を叙述する方法がとられている。

2つの地域社会の文化的・政治的特徴の描写を目

的とした、第4章「砂糖キビ作地帯のころ」では、「地主＝農園経営者」と「刈分け小作農と居住労働者」という2つのテーマに焦点があてられている。まず、ネグロス島とパンパンガ州の砂糖キビ作地主の、浪費型の消費性向や融資依存型の農園経営体質が指摘され、ついで、かれらがフィリピン革命において一様に形勢を観望する日和見主義的態度をとった事実が述べられている。しかし、アメリカの対比貿易政策に対しては、ネグロス島とパンパンガ州の地主層では対応が異なり、前者が米比間の自由貿易関係の樹立にきわめて熱心であったのに対し、後者では賛成派と反対派に分かれたとしている。他方、刈分け小作農と居住労働者については、両地域でのインタビュー調査に基づき、1920年代頃のかれらと地主との関係、小作形態、農園での生活様式の再構成が試みられる。ついで、フィリピン革命期にいずれの地域でも台頭した千年王国運動が比較される。この結果、行政町や村が住民の「コミュニティ」として機能していたパンパンガ州では「コミュニティ」の精神が、他方、大衆の生活の場の単位がアシエンダであり、行政町や村が住民の「コミュニティ」として機能していなかったネグロス島では個人主義の観念が発展し、それぞれの地域社会の遺産として後年に引き継がれていったとの結論に達している。

第5章「製糖工場、1920～34年」は、「砂糖にとっての新時代」、「砂糖生産社会と製糖工場」、「緊張」の3つの節に分かれている。「砂糖にとっての新時代」では、セントラル (central) と呼ばれる近代的製糖工場設立以後、フィリピンの砂糖産業がアメリカ市場依存型へと変化する過程を追うため、1920年代から30年代前半の砂糖価格の推移と砂糖輸出入量、西ネグロス州とパンパンガ州の主要製糖工場別砂糖生産量、製糖地区別ヘクタール当り砂糖生産量の変化が示される。ついで、それぞれの製糖工場の投資・経営状況を吟味しながら、フィリピン製糖業企業家グループの生成過程が追跡され、それが強力な利益集団としてフィリピン政界に影響力を及ぼしていく状況が描写されている。

「砂糖生産社会と製糖工場」では、製糖工場の設立によって、西ネグロス州とパンパンガ州の砂糖生

産地帯の社会構造がどのように変化したのかがとらえられている。まず、製糖業企業家グループが台頭するにつれ、とくに西ネグロス州では、一般の砂糖キビ作地主との利害の衝突が生まれ、中小の地主や借地人の利益が損われることが多くなった事実が指摘される。ついで、2地域の農園の経営形態について言及される。それによると、西ネグロス州では賃労働制が定着し、賃金形態は日当払いよりも出来高払いが増加したが、パンパンガ州では、刈分け小作制が依然として主流であった。しかし、パンパンガ州北部の大規模な農園では、地主の代理人として、管理人 (palsunero, katiwala) が雇用され、かれのもとで小作農が米と砂糖キビの双方を生産していたという。

「緊張」では、1929～34年の不況期の社会政治状況が、製糖業者 (centralista) と砂糖キビ生産者 (planter) との利害衝突と、千年王国運動や農民・労働運動の高揚の事例によって示されている。製糖業者と砂糖キビ生産者との対立は、とくに西ネグロス州で、分糖率をめぐる展開された。すなわち、砂糖キビの加工費として製糖工場が求める取り分と、砂糖キビの生産費として砂糖キビ生産者の要求する取り分の比率をめぐる対立である。他方、農民・労働運動は、むしろパンパンガ州で高まりをみせた。西ネグロス州では、千年王国運動にせよ、労働運動にせよ、大衆運動が一部の農園労働者に影響を与えたにすぎなかった。これに対し、パンパンガ州では、1920年代末からペドロ・アバド・サントス (Pedro Abad Santos) の影響下で農民・労働者の組織化が進んだからである。

第6章「割当制、1935～41年」では、砂糖割当制導入以後から日本占領期直前までを扱っており、「砂糖と割当制」、「砂糖生産社会」、「対抗」の3節が設けられている。章の構成のしかたは、第5章と同じであり、ほぼその延長線上に叙述が進められている。まず、「砂糖と割当制」では、フィリピンにおける砂糖の生産割当制度の実施形態が素描され、砂糖価格の下落と割当制導入による生産調整・削減のもとで、製糖業者たち (とくに西ネグロス州) が権益を保持するために行なった政界工作が紹介され

る。ついで、「砂糖生産社会」では、1930年代後半にとくに西ネグロス州で進化した、製糖業資本のいっそうの寡占化、そして西ネグロス、パンパンガ州における大規模砂糖キビ生産者への割当集中の加速化と、分糖率をめぐる製糖業者と砂糖キビ生産者との対立の激化が明らかにされる。さらに「対抗」では、不況期における農民・労働者の所得や収入の激減、失業問題の深刻化が指摘され、パンパンガ州では、アバド・サントス率いる社会党(Socialist Party of the Philippines: SPP)が農民・労働者を組織することに成功したのに対して、ネグロス島では、単発的な争議を除き、組織的な労働運動は展開されなかった事実が強調される。

最後に、「エピローグ」では、日本占領期にほとんど停止状態に置かれたフィリピンの砂糖産業が、戦後独立後いかなる軌跡をたどりながら変化してきたのか、そのなかで、西ネグロス州とパンパンガ州の砂糖生産地帯はどのような変貌を遂げたのかを概観されている。

II 評価と問題点

以上、本書を構成する各章の要約から明らかなように、本書は、ネグロス島（とくに西ネグロス州）とパンパンガ州の砂糖生産地帯の比較史的考察を試みながら、フィリピンの砂糖産業に関わる経済・社会・政治および文化的事象をきわめて多岐にわたって網羅的に記述している。しかも、ひとつひとつの事実を、さまざまな史資料や既存の研究に依拠しながら、注意深く確定した点で密度の高い業績となっている。この意味で、本書は、ネグロス島とパンパンガ州をモデルとした、フィリピン砂糖生産地帯のすぐれた社会史研究として評価することができる。しかし、問題点がないわけではない。紙数の都合上、主な問題点として3点のみ列記しよう。

まず、構成上の問題である。すでに各章の紹介のなかでも示したが、本書の第1～3章と第4～6章では、叙述方法ががらりと変化している。すなわち、前者では、ネグロス島とパンパンガ州の記述が別個になされているのに対し、後者では、各節のなかで、

上記2地域の状況が同時並行的に記述されている。第4～6章でこのような記述方法が選択されたのは、おそらく、2地域の単なる比較史研究を超えて、それぞれの地域社会と全国レベルの政治経済構造との接合様式をも浮き彫りにしたい、という著者のねらいからであろう。だが、この叙述方法は成功したとは言にくい。2地域を一括して論じてしまったために、それぞれの地域の歴史の個性と連続性が著しく読み取りにくくなってしまったからである。また、第4章では、2つのテーマに関する論点があちこちに拡散してしまい、総花的記述に終わったという印象が否めない。

評者の考えでは、第4～6章においても第1～3章と同様に、ネグロス島とパンパンガ州の記述を各テーマごとに別々に整理し、それを各章の最後で総括するという手法を貫くべきであったと思う。さらに、それぞれの時期の2つの砂糖生産地域の構造的特徴をより明確にするため、取り上げるべき課題を絞り込み、いわば通時的变化と共時的構造のマトリックスを読者にもっと明確に提示すべきではなかったかと思われる。とくに本書の真ん中に位置する第4章の出来具合がよくないことは、最も惜しまれる点である。

次に、著者がネグロス島とパンパンガ州の比較を試みた理由のひとつは、ネグロス島（とくにその西部）が19世紀後半に誕生した砂糖キビ単作地帯なのに対し、パンパンガ州は、中部ルソン地方の穀倉地帯であり、同時に砂糖キビ作地をも包摂するという、米糖共存地帯であったという、両地域の相違であろう。これに関連して、両地域の砂糖キビ作の比較研究において、従来から最も重要な課題とされてきたのは、パンパンガ州やその他の中部・南部ルソン地方では、刈分け小作制が定着したのに対し、ネグロス島ではなぜ、またいつ頃から賃労働制が広範にみられるようになったのかを明らかにすることであった。

この問題について、著者は、第3章で、19世紀末のネグロス島とパンパンガ州の農園の経営形態を対照させ、とくにネグロス島における借地経営者の存在に注目する（前述）。さらに、かれは、第5章で、

1930年頃のネグロス島でも、アクサ (acsa) と呼ばれる刈分け小作農が存在し、2～8 ㌩の農地で砂糖キビと稲を栽培していたが、その栽培面積合計はネグロス島全体の砂糖キビ作地のなかのごく一部を占めていたにすぎないと論じている (172ページ)。だが、肝心の賃労働制の生成と定着のメカニズムについてはまったく触れられていない。かねてから、この問題に関心をよせていた評者としては、この課題に本書が答えていないことに大きな不満を感じざるをえない^(注3)。

第3に指摘すべき点は、農民・労働運動の取り上げ方についてである。確かに著者が論じるように、1930年代後半にパンパンガ州ではアバド・サントスを指導者とする組織的大衆運動が高揚し、それと比較すれば、西ネグロス州での労働運動は盛り上がり方を欠いていた。とはいえ、西ネグロス州や隣島パナイ島を含む西ビサヤ地域でも、1928年にホセ・ナバ (Jose Nava) を指導者としてフィリピン労働者同盟 (Federacion Obrera de Filipinas: FOF) が結成され、30～31年には港湾・倉庫労働者を中心に、製糖工場労働者をも巻き込んだ労働争議が起きている。さらに、1938～39年にも、FOFは幾度にもわたって製糖工場でストライキを打ったのである^(注4)。著者は、第5章でFOFの運動に言及しているが、第6章ではまったく触れずに終わっている。パンパンガ州との相違を強調するあまり、著者は、西ネグロス州における大衆運動の存在と連続性に対する十分な配慮を欠いてしまったのではなからうか。これも、本書の惜しまれる点のひとつである。

以上、手短かに問題点のみをまとめてみた。公平を期するために最後に付言すると、本書は、上記のような問題点をもちつつも、この分野において従来にないスケールで一次資料を駆使した、第一級の研究書であることに間違いない。今後、本書は、多くの読者を得て、フィリピン砂糖生産地域史研究のスタンダードワークとしての地位を獲得することにならう。

(注1) Norman Owen et al., *Compadre Colonial-*

ism, Philippine-American Relations: 1898-1946 (n. d.; reprint 1st ed., Manila: Solidaridad Publishing House, 1971), p. 108.

(注2) 永野善子『フィリピン経済史研究——糖業資本と地主制——』勁草書房 1986年は、この研究成果をまとめたものである。

(注3) 評者は、ネグロス島では、農園付属の製糖所における1880年代の技術革新 (イギリス製輸入圧搾機の導入) を契機として、まず大規模農園で賃労働制が誕生し、さらに、1920年代の製糖工場設立期における生産性の向上をきっかけに、中小規模の農園でも刈分け小作制から賃労働制への変化が生じたのではないかとの見通しをもっている。19世紀後半のネグロス島の賃労働制については、さしあたり、以下をみよ。永野善子「19世紀後半におけるフィリピン糖業の発展——ネグロス島の甘蔗アシエンダ経営を中心に——」(『アジア経済』第17巻第10号 1976年10月) 34～53ページ/同『砂糖アシエンダと貧困——フィリピン・ネグロス島小史——』勁草書房 1990年 第3章。

なお、F・V・アギラル・ジュニア (Filomeno V. Aguilar, Jr.) は、1920年代にネグロス島で農園経営の様式が刈分け小作制から賃労働制へと移行したのに対し、パンパンガ州では刈分け小作制が維持された背景を、次のように分析している。すなわち、ネグロス島ではパンパンガ州よりヘクタール当り砂糖生産量が多く、1920年代の生産性向上期に刈分け小作制を維持すると、小作農の取り分が著しく増加してしまうようになった。そのうえ、刈分け小作制のもとで、それまで地主側が負担してきた、肥料・蔗苗・収穫労賃などのコストが上昇したため、以前と同様に刈分け小作制を維持することが、地主にとって著しく不利となった。他方、パンパンガ州の砂糖キビ作地は稲作地と共存しており、地主が砂糖キビ作地だけで賃労働制を導入することが困難であった。このため、地主は、賃労働制を導入せずに、小作農に対して、単位面積当り収量を増加して、地主が負担する生産コスト増加分を補償するよう求めた。Filomeno V. Aguilar, Jr., "Phantoms of Capitalism and Sugar Production Relations in a Colonial Philippine Island" (Ph. D. diss., Cornell University, 1992), pp. 429-441.

(注4) 永野『砂糖アシエンダと貧困……』第9章参照。